

---

# ＋ 十字架 ＋

久遠神無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十字架†

### 【Nコード】

N9691X

### 【作者名】

久遠神無

### 【あらすじ】

廃墟だらけの壊れた世界に一人静かに佇む男。

その血に汚れた腕が真っ直ぐにわたしに伸ばされる……。

誰もが願う世界の理を壊そうとする愚かな願い。

吸血鬼の少女と少年を中心に廻り始める運命の歯車。

その先にある未来は救いの光か、昏き孤独の待つ闇か。

## プロローグ（前書き）

そこはセピア色の世界だった。

時折ぶつ切りのノイズが走ったり、映像も荒く、漠然としており昔の映画を見ているようで他人事のような感が否めない。

しかし自分の記憶だと、心のどこかで訴える声がだんだん大きくなっている。

その廃墟の瓦礫の中に誰かが佇んでいた。

その人の映像は一層酷く、顔すら歪んでいて誰だか判断することは出来ないくらい酷いものであった。

空からまるで雨が降ったかのように彼は濡れていて。しかしその服を濡らしていたのは雨ではなかった。

赤黒くどこか見覚えのある、馴染み深いもの　血、であった。

頬に一筋の透明な液体が伝う。

それはやがて朱に染まり、血に混ざり、わからなくなってしまうた。

男の血に染まりきった手が伸ばされ、囚れそうになったところで世  
界は閉じ、暗転した。

まだその血の香りが鼻腔に残っていた　。

## プロローグ

ぎしり、となにかが軋む音で、少女は目を覚ました。身体を寝そべらせたまま辺りを見回してみるが、まったくと言っていいほどここが、どこなのかわからなく、唯一わかるのは外は暗闇ということだけ。

少女は上半身を起こし、身体を竦めた。

「…ここ、どこ？」

その問いに答える者はいなく、部屋は再び静寂へと戻った。とりあえずベッドから出ようと足をブランケットから出そうとした時、コンコンと扉がノックされた。

応える間もなく扉が開き、麗人が姿を現した。

シルバーグレイの長い髪を一括りに纏め、その燃えるように赤い瞳を驚きで見開かせている。

そして少女の方へとずかずか近づいてきた。

「あ、あの………？」

“あなた、誰ですか？”

そう訊ねようと口を開いたが、目の前男によって邪魔されてしまった。

羽交い締めるようにその両腕を少女に巻きつけ、華奢な身体を壊してしまっんじゃないかと思うくらい、ぎゅゅと抱き締めたからである。

「よかった、咲姫。もう目覚めないのではないかと思ってしまった」  
少しその身体を離し（しかしその左腕は少女の腰を抱き、右手は頬を撫でている）、少女の瞳を覗き込むようにして見詰めている。

「咲姫？」

不思議そうに凝視する彼は一瞬目を眇め、今しがた、くぐってきた扉へと向かって声を張り上げた。

「むなかた宗像！」

するとどこかからか姿を現した片目鏡モノクルをかけた白衣を着た老人が男に近づく。

「どうなさいましたか紫苑様。またお仕事を抜け出されて此方いらっしやるなんて……」

「小言は後だ！ 咲姫の脳波を調べろ」

一瞬、訳のわからなそうな表情を浮かべた老人だが、即座に切り替え、畏まりましたと深く頭イラキを垂れた。

連れて来られた先は何に使うかもわからないようなたくさんの機材が集められた真っ白な壁の部屋だった。

その中の一つに寝そべるようにと言われ、機械が覆い被さって数分

が経ち、検査が終わったらしく老人に手を貸され、また別の部屋へと移動させられた。

その部屋はどの部屋よりも大きく、広かった。

そこにいたのは先程の男と、艶やかな美女。

にっこりとこちらを見て笑う彼女にドキっとした。

「結論から申し上げます。紫苑様の予感通り、咲姫様は記憶喪失でございます」

老人の冷静な声とは裏腹に男はがっくりと頂垂る。

慌てる少女を宥めるように美女が肩に手を置き、微笑みかけた。

「紫苑は私がかどうにかするわ。だから咲姫ちゃんは着替えてきなさい。まだ寝巻きのままでしょう？」

はっ、と少女は自分の身体を見下ろした。

ゆったりとしたワンピース型の寝巻きのままであった。

「ね？ 大丈夫。紫苑は私が見張っておくから」

「あ、あの。でも……」

「？」

「場所が……」

か細い声でそう告げれば、彼女は顔を花のかんばせように開き、少女をやさしく見守っていた。

「蒼を迎えに寄越すわ」

有無を言わさぬ言葉と動作で少女を老人の前に出した美女はにっこりと少女を送り出す。

「宗像。咲姫ちゃんを。帰りは蒼を遣わしてちょうだい」

「畏まりました」

優雅に一礼すると老人は少女の左手に手を添え、戸惑う少女を一つの笑顔で黙らせ、一つ部屋の前まで案内をした。

「それでは」

深くお辞儀をすると凜と背を伸ばし、キビキビ歩き去る。

少女は焦げ茶色の観音開きの扉を改めて見詰め、一瞬息を詰めると精緻な飾りに彩られているドアノブに手をかけた。

十数分後、少女はMILELYのワンピースとロートルシューズのパンプスをその身に纏いひよこりと扉を少しだけ開け廊下を見回した。

するとそこには、儂げな雰囲気を醸し出す美少年が壁に背を預け、目を瞑っていた。目を縁取る睫毛は黛藍色で頬に影を落とすほど長く、少し視線を上げれば同色の髪が。

瞼の下の瞳は何色なんだろう。

じーっと見詰めていると、ぱちりと少年の瞳が開いた。

ピクツと跳ね、部屋に思わず引き帰りそうになった少女の腕を少年が掴む。

振り返りざま、少年の目とかち合う。冷たい色の、アイスブルーの瞳だった。

「あ、お待たせしました……」

じっと見詰めてくる彼の瞳に少女はそう呟いていた。

そんなのには構わず少女の腕を掴んだまま、少年は歩き出す。

「ありがとう、えっと」

「蒼。水無月蒼」

「ありがとう。蒼くん」

そう感謝の言葉を小さな声で告げるとピタリと少年の歩みが止まり、複雑そうに驚いている目が少女を見下ろしていた。

きよとん、と小首を傾げて見上げていると、我に返ったらしい蒼が少女の手を引き、また歩き始める。そして低い声で呟く。

「蒼でいい」

「？」

「“くん”要らねえ」

ぱちぱちと二度瞬きをした少女はほっと頬を緩めると、

「うん。ありがとう蒼」

満面の笑みで蒼を見上げた。

先程と同じ部屋に連れてきた蒼はノックもなしに扉を開け、ずかずかと無遠慮に少女の手を引き入室した。

そこにはやはり先程と変わらない面子が揃っており、男はあのときそのまま頂垂れている。

「おっさん、連れてきたけど」

蒼の口から出てきた乱暴な言葉遣いに驚いたが、周りはまったくの無反応であったため普段からこうなんだと納得した。

男の方はどうにか立ち直ったらしく、晴れやかな笑顔で両腕を少女へと伸ばしてくる。

「おいでっ、咲姫」

ビクツと震えた少女は蒼の背に隠れ、そっと美女に救いの眼差しを送った。

それを心得たらしい美女は微笑みを浮かべ一つ頷くとぺしり、男の腕を目にも止まらぬ速さで叩き落とす。

「やめなさい紫苑」

泣き出しそうな表情を見せる男など歯牙にもかけず、老人に視線を移す。

「宗像」

「はい牡丹様」

眼鏡をかけ直した老人は少女と蒼を落ち込んでいる男とは逆の深い赤色の皮革のソファに座らせると自分は立ったまま、少女に話を始める。

「まずは…そうですね、咲姫様」

「はい」

何度も呼ばれ続けた名前が自分のことを示していることによろやく気づいた咲姫は落ち着いて応えた。

「此処おに居られる方々のご説明をさせていただきます」

すい、と品良く伸ばされた右手の先にはあの美女がいる。

「あのお方は睦月家のご息女であらせられる牡丹様でございます」

美しく揃えられた漆黒の髪がさらりと揺れた。

まるで一枚の絵のような美しさと凜とした雰囲気を持つ美女は牡丹と言つらしい。

次に老人は蒼を示す。

「もうご存知かも知れませんか。水無月蒼様でございます。とあるご事情で我が館に住んでおられます」

その揃った指先は落ち込んだままの男を指し示した。

「あの方はこの館の主であり、霜月家嫡男であり霜月を統べていらつしやるご当主、紫苑様でいらつしやいます」

そして紹介を終えた彼の手は彼の胸へと収まる。

「そしてわたくしはこの館で執事をしております、宗像と申します」  
ぺこりとお辞儀した老人は白衣を羽織っているが、執事にも見えなくはない。

「それでは本題に参りましょうか。紫苑様」

老執事の呼ぶ声にビクリと反応した紫苑は仲良くしていた大理石の床から即座に離れ、牡丹が元より座っていた咲姫達とは逆のソファに腰掛けた。

「ここでまともにご説明をなさるか、もしくは執務室へお帰りになり、兄の威厳をお見せするか、どちらになされますか？」

「“兄”？」

きよとんと不思議そうな表情を浮かべる咲姫に深みのある笑みを見せると宗像はこう告げた。

“はい。此方にいらつしやる紫苑様は咲姫様の兄上様にあたられます”

「え？」

ばちばちと三度、目を瞬かせ瞠目した咲姫は頭の中で再び老執事の言葉を反芻した。

「兄？」

「はい」

「あの人が私のおにいさまなんですか？」

「そうでございます」

深い朱が咲姫を見詰めている。

確かに腕に絡みついている髪は彼と同じシルバーグレイ色だったが、血の繋がりがあなど、考えもしなかったのだ。

「それでは本題に入らせていただきます」

まだ状況を飲み込めていない咲姫はその言葉にはっと我に返り、心持ち宗像に身体を向けた。

「咲姫、驚くかもしれないけれど聞いてくれ」

真剣な紫苑の眼差しに、咲姫は知らず知らずの内、ごくりと喉を鳴らした。

「僕達は人間じゃないんだ」

「え？」

紫苑が何を言っているのか、理解出来なかった。  
その事実が咲姫が考えていた以上に突拍子のないものだったから余計に。

「確かに見た目や言葉はヒトとあまり変わりはない。しかし僕達は遥かに人間を凌ぐ寿命と治癒力を持っている」

「人間じゃ、ない」

「そうだよ。僕らは人間じゃなく、吸血鬼と呼ばれる生き物なんだ」  
それはまるで空想のようなお話。

しかしどこか咲姫も感じていた違和感はそれを裏付けるかのように強くなってきた。

「吸血鬼ってなに？」

震える声でようやく絞り出した疑問。

急激に喉が干上がり水分が失われていくような気がした。

「近年ではヴァンパイアとも呼ばれる、血を啜って生きている人間とは種族の違う生き物だよ」

「血……」

「普段食べているものは人間と変わらないよ。時々不定期に血が飲みたくなるだけだ」

そう言われても、“人間ではない”という事実は咲姫に重く押しつけてくる。

「あとは、、、そうだな…人間にはない特殊能力を僕らは一人一人持っている」

「特殊能力？」

これまた耳馴染みのない単語だった。

「いわゆる超常現象を起こすことが出来るんだ。持っている能力はそれぞれ違うけれどね」

「おにいさまたちにも、ですか？」

ふっと頬を緩めた紫苑は、頷き肯定する。

「ヴァンパイアであれば誰だって持っているんだよ咲姫。それは親からの遺伝であったり、その者が自発的に造った能力であったりしてはいるけれどね」

それならば、

「私の能力は何なんですか？」

その咲姫の問いには誰一人として口を開かず、黙り込んでしまった。まずいことを訊いたのかとアタフタし始める咲姫を見て逡巡したのち、ようやく紫苑は口を開いた。

「咲姫の能力は誰も知らないんだ」

「知らない？ どうしてですか？」

「咲姫は能力を人に見せるのを極端に嫌ったんだ。兄である僕にも結局見せず終いで……。だから両親からの遺伝なのかすらもわからないんだ」

その言葉に湧いた疑問。

“おとうさまとおかあさまは？”

「先日、亡くなられました」

答えたのは宗像だった。

辺りがしーんと暗くなる。

「咲姫。今日はもう眠った方がいい」

「っでも、」

「今夜はもうだめだよ。また今度にしよう」

子供に言い聞かせるかのような紫苑の言葉に咲姫は納得出来なかったものの、頷いた。

「宗像。咲姫を部屋まで」

「承知しました」

宗像は咲姫を連れ、部屋を出た。

咲姫の背後でパタンと扉が閉まる音が響いた。

【幕間】

彼はソファの肘掛けに肘を置き、手の甲に顎を載せ、深い溜め息を吐き出した。

咲姫の記憶がなくなっていたのは、ある程度予想していた出来事だったが、こうなったことで面倒臭いことが増えたのもまた事実。

あの巫女の予知は今のところ外れ知らずだ。

「つまりは、あの男の願いのままに進んでいるというわけか……」  
だが、

「すべてを当てさせるわけにはいかない」

巫女の夢での咲姫の末路は、“死”だ。

あの男の愚かな願いのためだけに咲姫を殺させたりなど、しない。

コンコン、

「どろぞろ」

「紫苑様」

「咲姫は？」

「ぐっすりと眠っておられます」

その言葉に安心した紫苑はペンを取ると仕事を再開し始める。

「天啓が下る」

決して覆るわけがない世界の理を壊そうとする男の願いは咲姫によつて叶えられる。記憶をなくしたのはせめてもの抵抗なのだろう。しかし、願いを叶えるためには手段を問わぬのがあの男だ。

それならば未来を変え、妨害すればよい。

相手の手を読み品を読み、互いに干渉し合い、それぞれが望む未来を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9691x/>

---

† 十字架 †

2011年10月30日03時21分発行